

宗教と学問 (2) : 宗教は危ない!?

末本文美士

1、宗教過剰の時代か、宗教なき時代か?

森岡正博『宗教なき時代を生きるために』(法蔵館、1996)

宗教を信仰できない理由 (p.57)

(1) 絶対の真理は (この私も含めて) 誰によっても語られなかったし、これからも語られることはないであろうという感覚に忠実になる。

(2) 死後の世界の存在について、断定的に語らない。

(3) 世界と宇宙の成り立ち全体にかかわる根本的なことがらに関して、「××こそが正しいのだ」という断定的な態度を取らない。

(4) それらの根本的なことがらに対して、他人のことばや思考にみずからを重ねない。自分の答えは、あくまで自分のことばと思考で見出していく。

「宗教」と「宗教性」

ここでの「宗教」とは、教祖と教義と教団活動などが総合された運動体のことであり、「宗教性」とは、生死とは何か、死んだらどうなるのか、なぜ私は存在しているのかと言った、人間の生命の本質に関わる宗教的なテーマのことである。(p.61)

問題点 1、「宗教」の曖昧さ

2、歴史・伝統の無視

2、「宗教」という概念

2004年の統計 (『宗教年鑑』) —— 宗教人口が総人口 (約 12000 万人) の倍近くになる

神道系	107,778,194 (49.9%)
仏教系	95,555,343 (44.2%)
キリスト教系	1,917,070 (0.9%)
諸教	10,713,248 (5.9%)
計	215,963,855

他方、宗教を信じている人は、各種の世論調査で今日 30 パーセント以下

問題点

1、どうして宗教人口が総人口の 2 倍になるのか

2、それほど宗教の信者が多いのに、どうして世論調査では信者数が少ないのか

「宗教」の二重性

1、厳密な意味での自覚的な信仰

2、習俗化した活動——初詣、七五三、結婚式、葬式仏教 (神仏補完)

近代的な「宗教」 = religion (上記の 1 の意味)

島地黙雷 (1838—1911)

明治維新 (1868) による近代化の際、政府の神道重視、政教一致政策

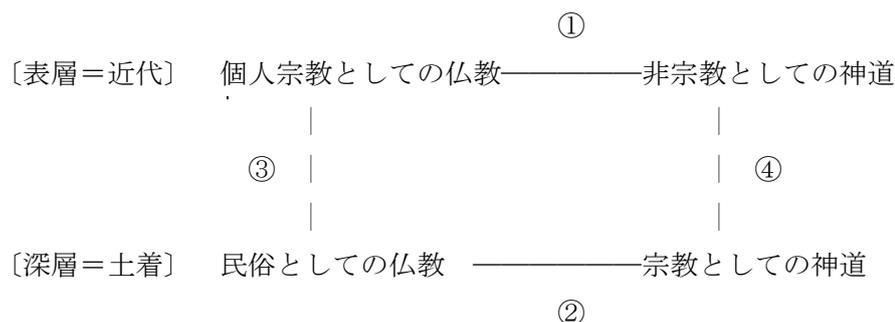
浄土真宗の反撃→政教一致政策からの離脱→信教の自由

信教の自由の根拠としての新しい「宗教」観念——個人の心の問題

従来の仏教や神道の観念と異なる

個人の問題であるよりは、家や地域の問題——葬式仏教、神仏習合

二重の隠蔽と補完



宗教学における宗教の定義

宗教とは、人間生活の究極的な意味をあきらかにし、人間の問題の究極的な解決にかかわりをもつと、人々によって信じられているいとなみを中心とした文化現象である。

(岸本英夫『宗教学』1961、p.17)

この定義の工夫

キリスト教的な一神教中心主義を避ける——定義の中に「神」が入らない

宗教的多元論、価値自由性

この定義の問題点

「究極的」——習俗的な宗教行為は必ずしも「究極的」であることを意識しない

「文化現象」——宗教は文化現象に留まらない

宗教は危ないか？

私は世界を滅亡させる強大なカーラ（時間）である。諸世界を回収する（帰滅させる）ために、ここに活動を開始した。たとえあなたがいないでも、敵軍にいるすべての戦士たちは生存しないであろう。（『バガヴァッド・ギター』11-32、上村勝彦訳）

逸脱としての宗教——宗教は「学」において扱えるか？

3、宗教と「学問」

大学と「学問」

日本における「学」の成立——帝国大学→国立大学における「学」

国家有用の「学」——自由な学の伝統を持たない

「学問の自由」の幻想——アカデミズム＝象牙の塔か、「知識人」か

全共闘運動の問題提起とそのゆくえ

社会の枠組の中の「学」＝専門家集団としての大学

全体の枠組は誰が決めるのか？——マルクス主義の崩壊→「全体」を問う議論の消滅

公共性は成り立つか——「公共哲学」への疑念

「哲学」＝philosophy の矮小化——哲学も個別学

〈人間〉の領域と逸脱

〈人間〉の概念 cf. 和辻哲郎『人間の学としての倫理学』

《もととなる拙著・拙稿》

末本文美士『仏教 vs. 倫理』（ちくま新書、2006）

『日本仏教の可能性』（春秋社、2006）

「がんばれ 哲学！」（小林康夫編『いま、哲学とはなにか』、未来社、2006）

《参考資料》

日本宗教学会発表要旨 2005.9.10

〈宗教〉を問い直す

末本文美士

1、オウム以後という状況 オウム事件を過大に取り上げることには必ずしも賛成できないが、それが日本のみならず、世界的にも大きな歴史の転換を象徴する出来事であったことは誤りない。マルクス主義国家の崩壊により、政治変革によって理想的社会が実現するという幻想が終末を迎え、それまでの政治テロが宗教テロに形を変えることになった。それはまた、宗教は平和を求めるものだという幻想の終末でもあった。よい宗教は平和を求めるが、悪い宗教は暴力に走るという単純な二元論は説得力を持たない。政治がダメならば宗教へ、というご都合主義もまた通用しない。むしろ本当に解明が必要なのは、政治や宗教の虚飾を剥いだところに露わになる人間存在のあり方である。だが、それでもなお宗教が根本の問題とならなければならないのはなぜであろうか。

2、「宗教」と「宗教学」の再検討 近代になって「宗教」という概念が religion の訳語として用いられるようになったとき、それが大きな偏りを持ったことは今日では広く認められている。もっとも早く「宗教」の概念を用いた島地黙雷らは、それを個人の心の問題に還元することによって、仏教が実際に果たしていた葬式仏教などの機能を隠蔽することになった。しかし、それならば「宗教」の概念を広げ、そうしたものも「宗教」の枠の中に入れて、「宗教学」はそのような現象をも研究する学として認めればそれで済むのかというと、それほど単純に解決するわけではない。どのように枠を広げても、「宗教」という特殊な現象を特殊な方法で解明する特殊科学の枠を出ることがない。

もちろんそのような特殊科学の意味を否定するわけではない。しかし、それによつては「宗教」がどのような意味を持つものか必ずしも十分に解明しきれない。「宗教」は「宗教学」を逸脱する。もし「宗教学」が自己の領域を禁欲的に限定しようとするのであれば、その領域を超える「宗教」の問題はどのように扱ったらよいのであろうか。

3、「人間」の領域を超えられるか 公共性を持ち、合理的な言語によつて説明可能な領域を和辻哲郎に倣つて「人之間」としての「人間」の領域と呼ぶことにしたい。その領域において倫理が成り立ち、また科学が成り立つ。しかし、「人間」の領域はそれで完結しているわけではない。個として私の感ずることがすべて言語化して公共領域に乗せられるわけではない。人は常に何らかの形で「人間」を逸脱した公共化できない領域と関わらざるを得ない。「人間」を超えることすべてを単純に「宗教」ということはできない。しかし、宗教は「人間」と「人間を超えるもの」、あるいは「語りうるもの」と「語りえないもの」が交錯するところに成り立つ営為であり、それを経験の積み重ねにより方法化している。

そのように考えると、なぜ「宗教学」が「宗教」を十分に扱いきれないかが明らかになる。特殊科学としての「宗教学」は、あくまで「人間」の領域に属する人文科学の一つであり、その枠の中に入ってくる問題を扱うことができる。例えば、言語化された宗教の教理を論じたり、「人間」の社会の中での宗教の役割や宗教教団の問題を扱うことはできる。しかし、肝腎の「人間」の領域を超えるとき、それは学の対象から外れる。

それならば、言語で表現できないことは、体験する以外ないのであろうか。「宗教学」でなく、「宗教」そのものに跳び込むほかないのであろうか。しかし、「人間」と「人間を超えるもの」、あるいは「語りうるもの」と「語りえないもの」とは必ずしも画然と分かれるわけではない。「宗教」と密接に関わりつつ、しかもただちに「宗教」とはいえない言語的な営為が、一種の「哲学」として成り立ちうるのではないだろうか。もちろん、そのときはまた、「哲学」とは何かが改めて問われなければならない問題となるが。

(『宗教研究』347、2006 掲載)